

茨城県教育財団文化財調査報告第221集

# 官女平遺跡

一般県道長岡大洗線道路改良事業地内  
埋 藏 文 化 財 調 査 報 告 書

平成16年3月

茨城県水戸土木事務所  
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第221集

# 官女平遺跡

一般県道長岡大洗線道路改良事業地内  
埋藏文化財調査報告書

平成16年3月

茨城県水戸土木事務所  
財団法人 茨城県教育財団

## 序

茨城県は、長期的な見通しのもと県土の基盤整備を行なっており、道路網につきましては、ゆとりのある社会の実現を目指した安全で快適な道路の整備を進めております。一般県道長岡大洗線の改良工事は、その一環として計画されたもので、その予定地内には官女平遺跡が所在しております。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県水戸土木事務所から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成14年11月に当遺跡の発掘調査を実施いたしました。

本書は、官女平遺跡の調査成果を収録したものです。本書が、学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県水戸土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、大洗町教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、衷心より感謝申し上げます。

平成16年3月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 齋藤 佳郎

## 例　　言

1 本書は、茨城県水戸土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成14年度に発掘調査を実施した、かくじょせんせい茨城県東茨城郡大洗町大賀町2307番地ほかに所在する官女平遺跡の発掘調査報告書である。

2 当遺跡の発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。

調　　査　　平成14年11月1日～平成14年11月30日

整　　理　　平成15年10月1日～平成15年10月31日

3 当遺跡の発掘調査は、調査第一課長阿久津久のもと、調査第一課第1班長鰐淵和彦、主任調査員川上直登・荒磯克一郎が担当した。

4 当遺跡の整理及び本書の執筆・編集は、整理第一課長瓦吹堅のもと、調査員小林健太郎が担当した。

## 凡 例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第K系座標を原点とし、X軸 = +34,600m, Y軸 = +650,800m の交点を基準点（A1a1）とした。なお、この原点は日本測地系によるものである。

調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を40m四方の大調査区に分割し、さらにこの大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C…、西から東へ1, 2, 3…とし、その組み合わせで「A 1 区」「B 2 区」のように呼称した。さらに小調査区も同様に北から南へa, b, c…j、西から東へ1, 2, 3…0と小文字を付し、名称は大調査区の名称を冠し、「A1a1」「B2b2」のように呼称した。

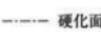
2 抄録の北緯および東経の欄には、世界測地系に基づく緯度・経度を（ ）を付して併記した。

3 遺構、遺物、土層に使用した記号は、次のとおりである。

遺構 住居跡 - S I 土坑 - S K 溝 - S D 柱穴 - ピット - P

遺物 拓本土器 - T P 土製品 - D P 石器・石製品 - Q 貝製品 - N

土層 搅乱 - K

 焼土・被熱痕  炉  粘土  硬化面

● 土器 ○ 土製品 □ 石器・石製品

4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

5 遺構・遺物実測図の掲載方法については、以下のとおりである。

(1) 遺構全体図は150分の1とし、各遺構の実測図は60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。

(2) 遺物は原則として3分の1の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについて個々に縮尺をスケールで表示した。

6 「主軸」は、竈を持つ竪穴住居跡については竈を通る軸線とし、他の遺構については長軸（径）を主軸とみなした。「主軸」及び「長軸」方向は、それぞれの軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N-10°-E）。

7 遺物観察表の記載方法は次のとおりである。

(1) 計測値の（ ）内の数値は現存値を、〔 〕内の数値は推定値を示し、単位はcm・gである。

(2) 備考の欄は、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

## 抄 錄

ふりがな	かんじょいらいせき							
書名	官女平遺跡							
副書名	一般県道長岡大洗線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書							
卷次								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第221集							
編著者名	小林 健太郎							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029(225)6587							
発行機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029(225)6587							
発行日	2004(平成16)年3月26日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
官女平遺跡	茨城県東茨城郡大洗 町大賀町2307番地ほか	08309 - 028	36度 18分 028	140度 33分 29秒 〔36度 18分 45秒〕 〔140度 33分 17秒〕	31 ~ 33m	2002.11.01 ~ 2002.11.30	225.00m <sup>2</sup>	一般県道長岡大 洗線道路改良工 事に伴う事前調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項			
官女平遺跡	集落跡	弥生	竪穴住居跡	3軒 弥生土器(壺形土器), 土製品(紡錘車・球状 土糞・管状土糞), 石 器(石藏・穂摘具カ・ 磨石), 炉石, 貝製品 (貝刃)	弥生時代と古墳時代の住 居跡が検出された。また, 弥生時代の住居跡からは穂 摘具と考えられる遺物が出 土しており、当地域の弥生 時代の生産様式を考える上 で貴重な資料となる。			
		古墳	竪穴住居跡 土坑	6軒 1基 土師器(壺・壺) 土師器(壺)				
	その他	時期不明	土坑 溝跡	1基 1条				

# 目 次

序

例言

凡例

抄録

目次

第1章 調査経緯 .....	1
第1節 調査に至る経緯 .....	1
第2節 調査経過 .....	1
第2章 位置と環境 .....	2
第1節 地理的環境 .....	2
第2節 歴史的環境 .....	2
第3章 調査の成果 .....	7
第1節 遺跡の概要 .....	7
第2節 基本層序 .....	7
第3節 遺構と遺物 .....	8
1 弥生時代の遺構と遺物 .....	8
(1) 壺穴住居跡 .....	8
2 古墳時代の遺構と遺物 .....	18
(1) 壺穴住居跡 .....	18
(2) 土坑 .....	27
3 その他の遺構と遺物 .....	28
(1) 土坑 .....	28
(2) 潟跡 .....	28
(3) 遺構外出土遺物 .....	28
第4節 まとめ .....	31

写真図版

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

茨城県水戸土木事務所は、東茨城郡大洗町大貫町地区において、一般県道長岡大洗線の道路改良事業を進めている。

平成12年6月28日、水戸土木事務所長から茨城県教育委員会教育長あてに、一般県道長岡大洗線道路改良事業地内における埋蔵文化財の有無とその取り扱いについて照会し、これを受けた茨城県教育委員会は、平成12年8月23日に事業地内の現地踏査、平成13年9月10日に試掘調査を実施した。その結果、開発予定地において官女平遺跡の存在を確認し、平成13年9月18日、茨城県教育委員会教育長から水戸土木事務所長あてにその旨を回答した。

平成14年8月19日、水戸土木事務所長から、茨城県教育委員会教育長あてに官女平遺跡について、文化財保護法第57条の3に基づく土木工事等の通知が提出された。平成14年8月23日、茨城県教育委員会教育長から、水戸土木事務所長あてに工事により埋蔵文化財に影響が及ぶことから、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。平成14年9月6日、水戸土木事務所長から茨城県教育委員会教育長あてに、事業地内における埋蔵文化財（官女平遺跡）の発掘調査の実施について協議書が提出された。平成14年9月17日、茨城県教育委員会教育長は水戸土木事務所長あてに発掘調査の範囲及び面積等について回答し、調査機関として、財團法人茨城県教育財団を紹介した。水戸土木事務所長と茨城県教育財団は、埋蔵文化財発掘に関する業務の委託契約を結び、官女平遺跡の発掘調査を実施することとなった。

## 第2節 調査経過

官女平遺跡の発掘調査は、平成14年11月1日から平成14年11月30日までの1か月間実施した。その概要を表で記載する。

期間 工程	11月		
調査準備 表土除去 遺構確認			
遺構調査			
遺物洗浄 注記作業 写真整理			
補足調査 及び 撤収			

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

大洗町は茨城県の中央部に位置し、東西約2.5km、南北約9kmと南北に細長い町域を有している。東は太平洋が広がり、北は那珂川が東流している。地形は東の太平洋沿岸に幅の狭い海岸砂丘が広がり、河川周辺に沖積低地がみられるほかは、台地がほとんどを占めている。台地・段丘は複雑に入り組んだ谷によって開析され、北から大洗台地、大洗段丘、大賀台地、夏海台地に分けることができる。それぞれは第四期洪積世に堆積した砂を主とする見和層、細かい疊混じりの粒砂を主とする河成段丘疊層、厚さ1~4m程度の火山灰起源の闇東ローム層が連続して堆積し、最上部は腐植土層となっている。

当遺跡は涸沼川右岸の標高30~33mの大賀台地北端部に位置しており、台地上には山林が広がっている。三方に望む冲積低地は、台地と約24mの比高をもって開けており、その先には涸沼川が横走している。

### 第2節 歴史的環境

当遺跡の所在する大賀台地は鹿島台地の一部をなし、谷を挟んで北に大洗台地、南に夏海台地が広がっている。ここでは台地・段丘における主要遺跡を取り上げる。

旧石器時代では、大洗台地のドンドン山遺跡〈2〉、磐船山遺跡〈3〉から数点のナイフ形石器が発見されているにすぎない。

縄文時代の遺跡は平坦な台地上に分布がみられ、代表的な遺跡として大賀台地上に立地する大賀落神北貝塚〈10〉、大賀落神南貝塚〈11〉、大洗台地上に立地する吹上遺跡〈4〉などをあげることができる。大賀落神北・南貝塚は戦後まもなくから知られている遺跡で、これまでに20数回に渡る調査が行なわれている。平成10年に行なわれた発掘調査では、両遺跡合わせて貝塚12地点と遺物包含層6か所が確認され、縄文時代後期前葉から後期中葉を主とする土器が出土しており<sup>1,2)</sup>。貝塚は地点ごとに時期差が認められ、当時の人々の土地利用の変遷がたどれる好例である。また、遺物包含層についても多量の土器や石錐、土器片錐、磨石などが出土し、大賀台地周辺は古潤沼湾により、外洋性と内湾性の魚貝類が生息し、食料獲得の場として、最良の場所であった<sup>3)</sup>。

弥生時代の遺跡は、大洗町全域に数多く確認されている。大洗台地では後期前半の磐船山式の標式遺跡である磐船山遺跡、大賀台地では長峯遺跡〈24〉、常福寺遺跡〈28〉などがある。長峯遺跡は昭和48年、大洗高校の建設に伴って発掘調査が行われ、17軒の竪穴住居跡と甕棺墓と考えられる土坑1基が発見されている<sup>4)</sup>。大洗段丘上には、一本松遺跡〈8〉、団子内遺跡〈16〉、鷲釜遺跡〈17〉などの大集落が分布している。鷲釜遺跡では竪穴住居跡約200軒、土坑墓のほかに竪穴住居の床面を掘りくぼめて埋葬している例や炉上に埋葬する屋内埋葬例も検出されており、弥生時代後期の墓制を知る上で貴重な調査例である。また、長峯遺跡出土の土器からは水稻農耕や織物の存在を証明する稻穂の圧痕や、布目痕のある土器が出土し、さらに鷲釜遺跡からも布目痕のある土器が出土しており、那珂川下流域の特色を示している。また、鐵錐・銅錐などが出土しており、同段丘上にある団子内遺跡でも鐵斧が出土するなど鐵器文化を受容した比較的高度な農耕社会の存在を知ることができる。夏海台地では南藤太郎遺跡〈33〉があり、鹿島線建設に伴う発掘調査によって弥生時代後期の堅

穴住居跡27軒が確認された。同じ台地に四反遺跡〈32〉、明後内遺跡〈34〉、千天遺跡〈12〉も確認されている。

各台地における弥生時代の住居は、台地縁辺に営まれ稻作農業を営む集団が、繩文時代の生活環境を引き継いで、村落を形成していたようである。東西の海浜と支谷部に水田を有する遺跡の自然環境は、漁労活動と農耕の両面において、極めて恵まれた地域であった。

古墳も各台地にみられ、大洗段丘には全長96.4mの大型前方後円墳である鏡塚古墳〈7〉があり、規模や副葬品などから、被葬者はこの地域一帯を支配した豪族である可能性が高い。

古墳時代の集落も町域の広い範囲で確認されている。大貫台地には般度遺跡〈18〉・落神遺跡〈25〉・栗林遺跡〈27〉・常福寺遺跡の各遺跡がある。これらは弥生時代と同じく水稻耕作の可能な低湿地に臨む低台地上に立地するものが多く、古墳時代以後、奈良・平安時代に至る集落もほぼ以前の集落立地を踏襲している。また、古墳時代も中・後期になると沖積平野縁辺の丘陵や山間の支谷に面した台地に集落が進出する。これはおそらく稲作の進展などと関連するものであろう<sup>5)</sup>。

奈良・平安時代にはいると、律令制度のもとで、地方には国・郡・里が置かれ、大洗町周辺は鹿島郡に編入された。『文徳実録』には大洗磯前神社〈40〉が文徳天皇の856年に官社になったことや、鹿島灘に面していることから製塩が広い地域にわたって盛んに行われていたことが記されている。

中世では常福寺遺跡、小館遺跡〈38〉、一杯館跡〈39〉、天神西遺跡〈31〉などがある。小館遺跡は、濱沼に面した大谷川支谷の河口近くの舌状台地上に位置し、昭和53年、鹿島線敷設に伴って発掘調査が行われ、三条の空塗と二条の土塁の存在によって大きく二つの郭から形成されると考えられ、建武年間から南北朝期まで存在していたと考えられる<sup>6)</sup>。一杯館跡は西方に濱沼を望み、周囲は急崖となる自然に囲まれた要害で、中世大貫氏の築城と伝えられる。

以上、大洗の各台地・段丘に確認されている主要遺跡について述べてきたが、各時代にわたって、人々が生活した痕跡が残されている。

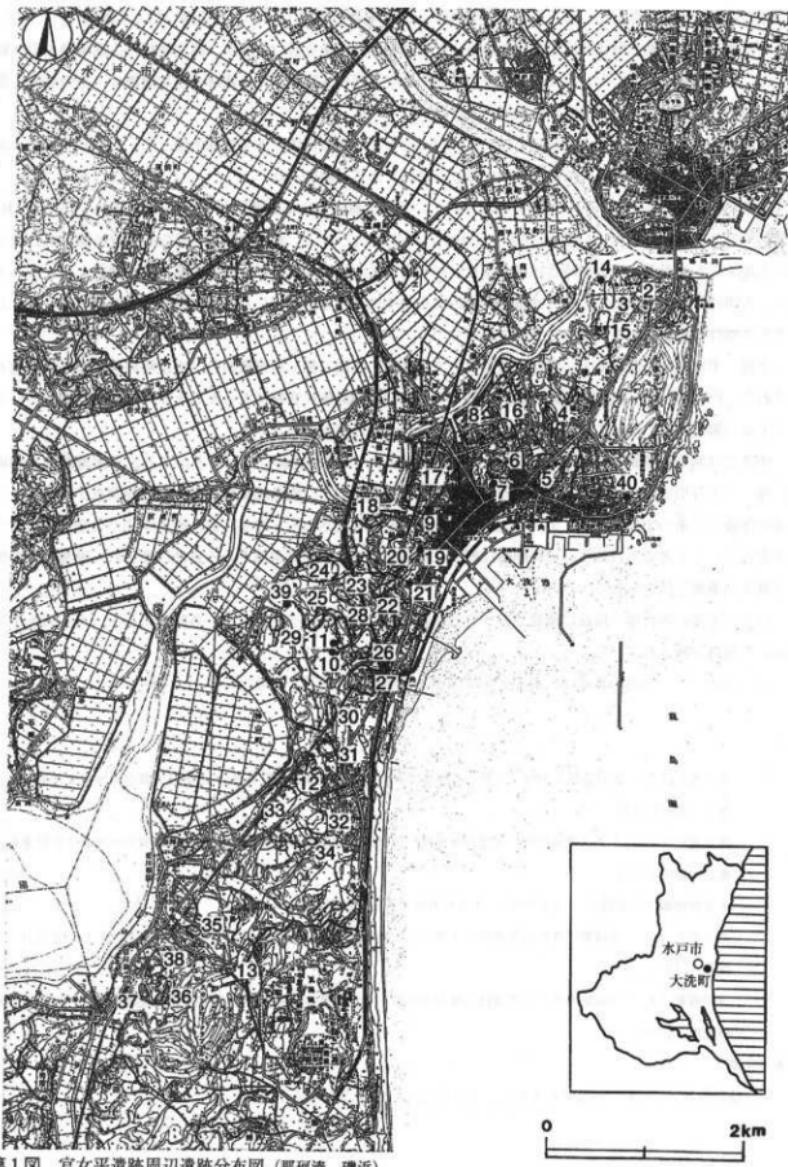
※ 文中の〈 〉内の番号は、表1、第1図中の該当番号と同じである。

#### 註

- 1) 井上義安ほか「大貫落神北貝塚」「大貫台地埋蔵文化財発掘調査報告書第1冊」大洗町大貫台地埋蔵文化財発掘調査会 2001年3月
- 2) 井上義安ほか「大貫落神南貝塚」「大貫台地埋蔵文化財発掘調査報告書第2冊」大洗町大貫台地埋蔵文化財発掘調査会 2001年3月
- 3) 大洗町史編さん委員会『大洗町史』大洗町教育委員会 1966年3月
- 4) 井上義安ほか「茨城県大洗町長峯遺跡」「大洗町文化財調査報告第4集」大洗町長峯遺跡調査団 1973年12月
- 5) 註2)と同じ
- 6) 寺門義範ほか「茨城県大洗町小館遺跡発掘調査報告－中世城郭の研究－」大洗地区遺跡発掘調査会・日本文化財研究所 1978年5月

#### 参考文献

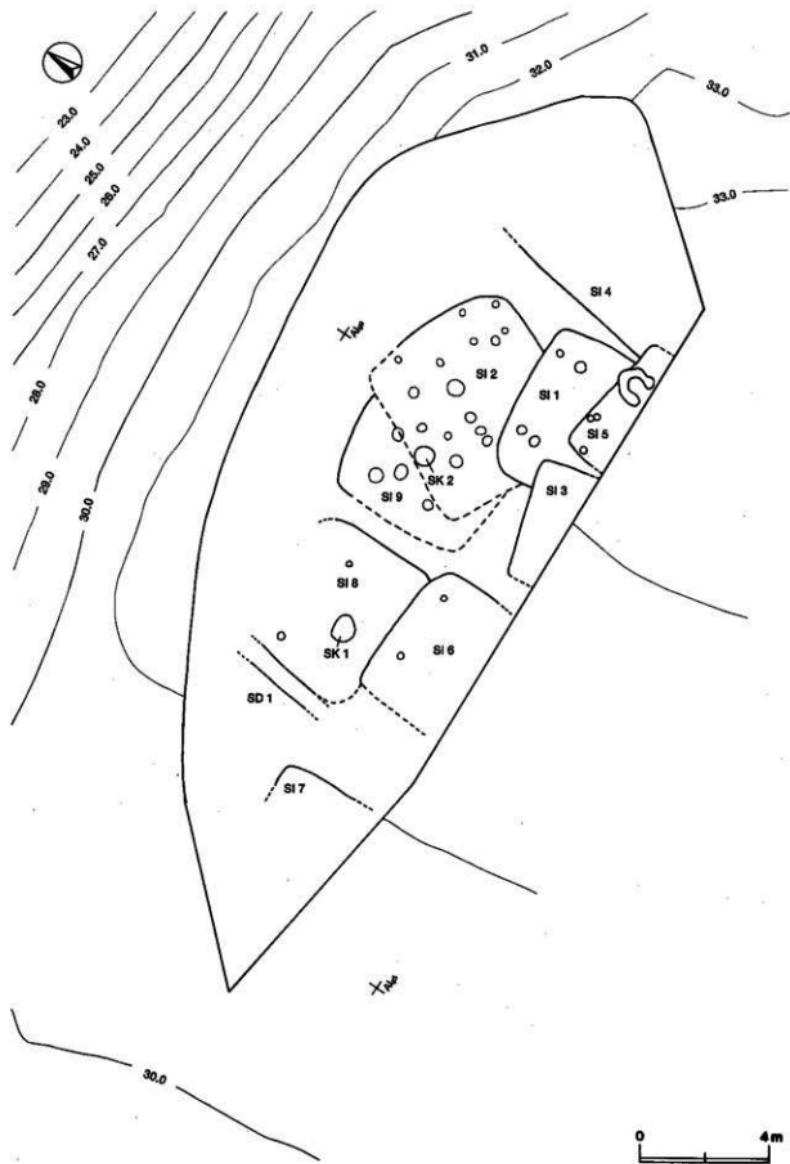
- ・茨城県教育庁文化課『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会 2001年3月



第1図 宮女平遺跡周辺遺跡分布図 (那珂湊、磯浜)

表1 官女平遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代					番号	時代					番号	時代				
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	中世	近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	中世	近世			
1	官女平遺跡		○	○					21	椎現坂横穴墓			○					
2	ドンドン山遺跡	○	○	○					22	寺ノ上遺跡		○	○	○				
3	磐船山遺跡	○	○	○		○			23	鬼窟遺跡		○	○					
4	吹上遺跡	○	○	○	○	○			24	長峯遺跡		○	○	○				
5	釜堀遺跡	○	○						25	落神遺跡	○	○	○	○	○	○		
6	車塚古墳群			○					26	中烟遺跡	○		○					
7	鏡塚古墳			○					27	栗林遺跡	○	○	○					
8	一本松遺跡	○	○	○	○		○		28	常福寺遺跡	○	○	○	○	○	○		
9	勘十堀遺跡	○							29	蜂内遺跡	○	○	○					
10	大貫落神南貝塚	○							30	稻荷前遺跡	○	○	○	○				
11	大貫落神北貝塚	○							31	天神西遺跡	○	○	○	○	○			
12	千天遺跡	○	○	○	○				32	四反遺跡	○	○	○	○				
13	おんだし遺跡	○	○	○	○				33	南藤太郎遺跡	○	○	○	○				
14	磐船山古墳			○					34	明後内遺跡	○		○					
15	二葉町遺跡	○	○	○	○				35	居尻遺跡	○	○	○	○				
16	团子内遺跡		○	○	○				36	石塚遺跡	○	○	○	○				
17	髭釜遺跡		○	○	○				37	大館遺跡	○		○					
18	船渡遺跡		○	○					38	小館遺跡	○	○	○	○				
19	富士山古墳			○					39	一杯館跡				○				
20	富士ノ腰遺跡		○	○	○				40	大洗磯前神社			○					



第2図 官女平遺跡遺構全体図

## 第3章 調査の成果

### 第1節 遺跡の概要

官女平遺跡は、今回の調査によって、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡であることが判明した。遺構としては、弥生時代の竪穴住居跡3軒、古墳時代の竪穴住居跡6軒、土坑1基、時期不明の土坑1基、溝1条が確認された。遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に3箱出土しており、遺物は弥生時代から古墳時代のものである。主な出土遺物は、弥生時代の弥生土器(壺形土器)、土製品(鉢、碗、球状土錘)、管状土錘、石製品(石鎧、穂積具、磨石、炉石)、古墳時代の土器(杯、甕)などである。

### 第2節 基本層序

基本層序を確認するテストピットは、調査区南西部の台地平坦部A1i6区に設置した。地表面の標高は約33.1mで、地表面から2.1mほど掘削した。基本土層図を第3図に示した。

第1層は、黒褐色の表土層である。ローム小ブロックを微量、ローム粒子を少量含んでいる。粘性・しまりは弱く、層厚は15~20cmである。

第2層は、暗褐色の表土層である。ローム中ブロック、ローム小ブロック、ローム粒子を少量含んでいる。粘性・しまりは弱く、層厚は14~20cmである。

第3層は、褐色のローム層である。砂粒、鹿沼粒子を少量含んでいる。粘性は弱く、しまりは強く、層厚は22~30cmである。調査区東部では確認できなかった。

第4層は、褐色のローム層である。砂粒、鹿沼粒子を微量含んでいる。粘性は弱く、しまりは普通で、層厚は7~15cmである。調査区東部では確認できなかった。

第5層は、褐色のローム層である。砂粒を少量含んでいる。粘性・しまりは普通で、層厚は16~29cmである。

第6層は、褐色の砂層である。鹿沼粒子を微量含んでいる。粘性・しまりは普通で、層厚は20~34cmである。

第7層は、褐色の砂層である。粘性・しまりともに普通で、層厚は3~10cmである。

第8層は、黄褐色の砂層である。粘性は弱く、しまりは強く、層厚は5~12cmである。

第9層は、明黄褐色の砂層である。粘性は弱く、しまりは強く、層厚は3~7cmである。

第10層は、明黄褐色の砂層である。粘性は弱く、しまりは強く、層厚は8~12cmである。

第11層は、灰黄色の砂層である。粘性は弱く、しまりは強く、層厚は3~5cmである。

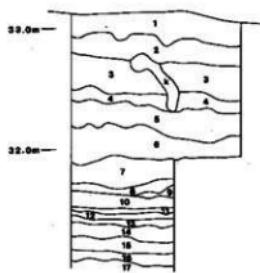
第12層は、暗赤褐色の砂層である。粘性は弱く、しまりは強く、層厚は3~6cmである。

第13層は、にぶい黄褐色の砂層である。粘性は弱く、しまりは強く、層厚は4~7cmである。

第14層は、にぶい黄褐色の砂層である。粘性は弱く、しまりは強く、層厚は6~15cmである。

第15層は、明褐色の砂層である。粘性は弱く、しまりは強く、層厚は8~13cmである。

第16層は、灰黄色の砂層である。粘性は弱く、しまりは強く、層厚は8~11cmである。



第3図 基本土層図

第17層は、明褐色の砂層である。粘性は弱く、しまりは強い。下層は未掘のため、層厚は不明である。

当遺跡の住居跡・土坑等の遺構は、調査区西部では第3層上面、東部では第3・4層が確認できず、第5層上面で確認した。

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 弥生時代の遺構と遺物

今回の調査で、竪穴住居跡3軒を確認した。以下、検出された遺構及び遺物について記載する。

##### (1) 竪穴住居跡

###### 第1号住居跡(第4図)

位置 調査区中央部のA1h9区に位置し、台地の平坦部に立地している。

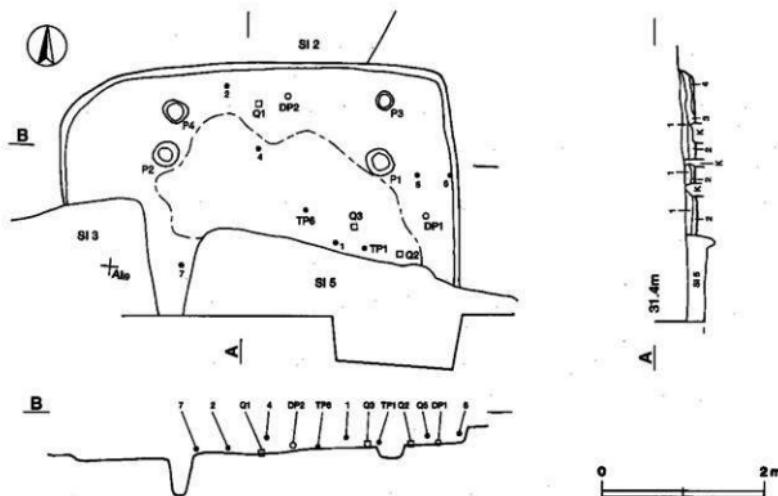
重複関係 北部で第2号住居跡を掘り込み、南西部を第3号住居跡、南部を第5号住居跡にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 長軸は4.90m、短軸は調査区域外に延びているため、確認できたのは3.02mで、隅丸方形または隅丸長方形と考えられる。主軸方向はN-83°-Eである。壁高は6~16cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 検出されていないが、Q3の炉石が出土していることから、第5号住居跡に廃されたと考えられる。

ピット 4か所。P1は深さ18cm、P2は深さ48cmで、配置から主柱穴に相当すると考えられる。P3・P4



第4図 第1号住居跡実測図



第5図 第1号住居跡出土遺物実測図

は配置から補助的な柱穴の可能性があるが性格は不明である。

覆土 4層からなるレンズ状の堆積を示した自然堆積である。

**土層解説**

1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量	3 黑褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
2 褐色 ロームブロック中量、焼土ブロック微量	4 ぶい黄褐色 ロームブロック少量、燒土粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片88点、土筋器片51点(环類2, 塔8, 頭類41), 土製品2点(管状土錠1, 細錠車1), 石製品3点(石錠1, 種摘具カ1, 炉石1)が出土している。弥生土器はほとんどが壺形土器の胴部片で、口縁部や底部は微量である。遺物は覆土上層から床面にかけてほぼ全域に散在しており、土筋器は覆土上層に多い傾向にあるが7のように床面から出土しているものもあり、検討が必要である。また、Q1はいわゆるアメリカ式石錠で北壁中央の床面から出土し、Q2は形態から種摘具の可能性があり、東側の床面から出土している。また、破片ではあるが、TP1・TP2は造構は確認できなかったが、弥生時代中期の遺物と考えられ、周辺に人々が生活を営んでいたことが想定される。

所見 時期が判別できる土器は少ないが、第2号住居跡との重複関係から弥生時代後期後半と考えられる。管状土錠、細錠車、アメリカ式石錠や種摘具の可能性がある遺物が出土しており、当該期の生産活動を示す好資料である。

第1号住居跡出土遺物観察表(第5図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	壺形土器	-	(31)	75	長石	ぶい黄褐色	普通	頭部は附加条二種(附加1条)の繩文。底部が目尻。	中央部覆土上層	
2	弥生土器	壺形土器	-	(43)	[38]	雲母・長石 石英・赤色粒子	ぶい黄褐色	普通	頭部は附加条二種(附加1条)の繩文。	北壁中央床面	
3	弥生土器	広口壺	[168]	(59)	-	長石・石英	ぶい黄褐色	普通	口部はヘラ状工具による彫み。口辺部は磨曲状工具(1単位6本)による波状文。	覆土中	
4	土筋器	窯	[94]	(74)	-	長石・石英 赤色粒子	ぶい黄褐色	普通	窯内・外面ナデ。窯部内・外面ヘラ削り。	北部中央覆土上層	80%, PL4
5	土筋器	塔	-	(19)	[32]	長石・石英	ぶい黄褐色	普通	体部外面ヘラ削き。内面摩耗。	東壁北部覆土上層	
6	土筋器	手捏土器	71	50	20	長石・石英 赤色粒子	ぶい黄褐色	普通	内・外面指痕。	東壁北部覆土上層	100%, PL4
7	土筋器	壺	-	(88)	-	雲母・長石 赤色粒子	灰黒褐色	普通	体部外面ハケ目調査。内面ハケ目調査後ヘラナデ。輪模み抜。	中央部床面	
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP1	弥生土器	壺形土器	-	(30)	-	長石・石英	ぶい黄褐色	普通	2本同時施文による渦文。	中央部床面	PL7
TP2	弥生土器	壺形土器	-	(31)	-	長石・石英	灰褐色	普通	附加条一様の繩文を施文後に平行化繩文。	覆土中	PL7
TP3	弥生土器	広口壺	-	(35)	-	長石・石英	ぶい黄褐色	普通	頭部に幾帯が溝入り押圧がみられる。その下に磨曲状工具(1単位3本)による山形文。	覆土中	PL7
TP4	弥生土器	広口壺	-	(37)	-	雲母・長石	ぶい黄褐色	普通	磨曲状工具(1単位4本)による格子目文。その下に横波状文で区画。	覆土中	PL7
TP5	弥生土器	広口壺	-	(25)	-	長石	ぶい黄褐色	普通	磨曲状工具(1単位4本)による波状文。	覆土中	
TP6	弥生土器	広口壺	-	(45)	-	雲母・長石	浅黄褐色	普通	附加条二種(附加1条)の繩文。	中央部覆土下層	
TP7	弥生土器	広口壺	-	(35)	-	長石・石英	ぶい黄褐色	普通	口部は繩文が彫され、口辺部と頭部の境は幾帯が溝入り指痕による押圧がみられる。	覆土中	

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備考
TP8	弦生土器	広口壺	-	(25)	-	長石・石英	灰褐色	普通	口縁部には擦痕が通り指擦による押圧がみられる。その下に磨削条工具(1単位3本)による横走文。	覆土中	PL7
TP9	弦生土器	広口壺	-	(28)	-	長石	にぶい緑	普通	底部は擦痕が無く軽い押圧がみられる。頭部は縦文様等は磨削条工具による波状文。	覆土中	
TP10	弦生土器	広口壺	-	(35)	-	雲母・長石	灰褐色	普通	底部は擦痕が無く軽い押圧がみられる。その上下に磨削条工具による波状文。	覆土中	
TP11	弦生土器	広口壺	-	(20)	-	長石・石英	にぶい緑	普通	スリット手法による1単位4本の範囲面焼波状文。	覆土中	

番号	器種	長さ	幅(往)	孔径	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
DP1	管状土錐	45	32	12	51.1	-	外面ナデ。	東壁中央床面	PL5
DP2	織錐草	18	48	0.6	(259)	-	外面ナデ。	北壁中央覆土 中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
Q1	石錐	20	15	0.5	0.9	チャート	両面入念な押圧削離。基部に深い抉り。	北壁中央床面	PL5
Q2	鍛錐具カ	7.6	37	1.0	50.4	鉄鋸器	側面に交互剥離による刃部作出。	東壁中央床面	PL5
Q3	炉石	25.2	65	5.7	1443	磁灰岩	鉄熱。	中央部覆土下 層	PL6

## 第2号住居跡(第6図)

位置 調査区中央部のA1g9区に位置し、台地の平坦部に立地している。

重複関係 西部で第9号住居跡を掘り込み、南東部を第1号住居跡、西部中央を第2号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 長軸は推定5.70m、短軸は推定5.06mで、隅丸長方形と考えられ、主軸方向はN-29°-Eである。壁高は16~36cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、炉の周辺が踏み固められている。

炉 2か所。炉1は中央部北寄りに位置し、長径52cm、短径45cmの橢円形で、床面を6cmほど掘りくぼめた地床炉であり、炉床は被熱により赤変硬化している。炉石は長軸と平行で、中央部に据えられており、上面が被熱によって赤変している。炉2は中央部の南寄りに位置し、長径35cm、短径25cmの橢円形で、床面をほとんど掘りこまず、炉床面は被熱により赤変硬化している。炉1には炉石が遺存しているため、炉2より新しいと思われる。

### 伊1土解説

1 赤褐色 燃土ブロック多量、ローム粒子微量

2 黄褐色 ロームブロック少量

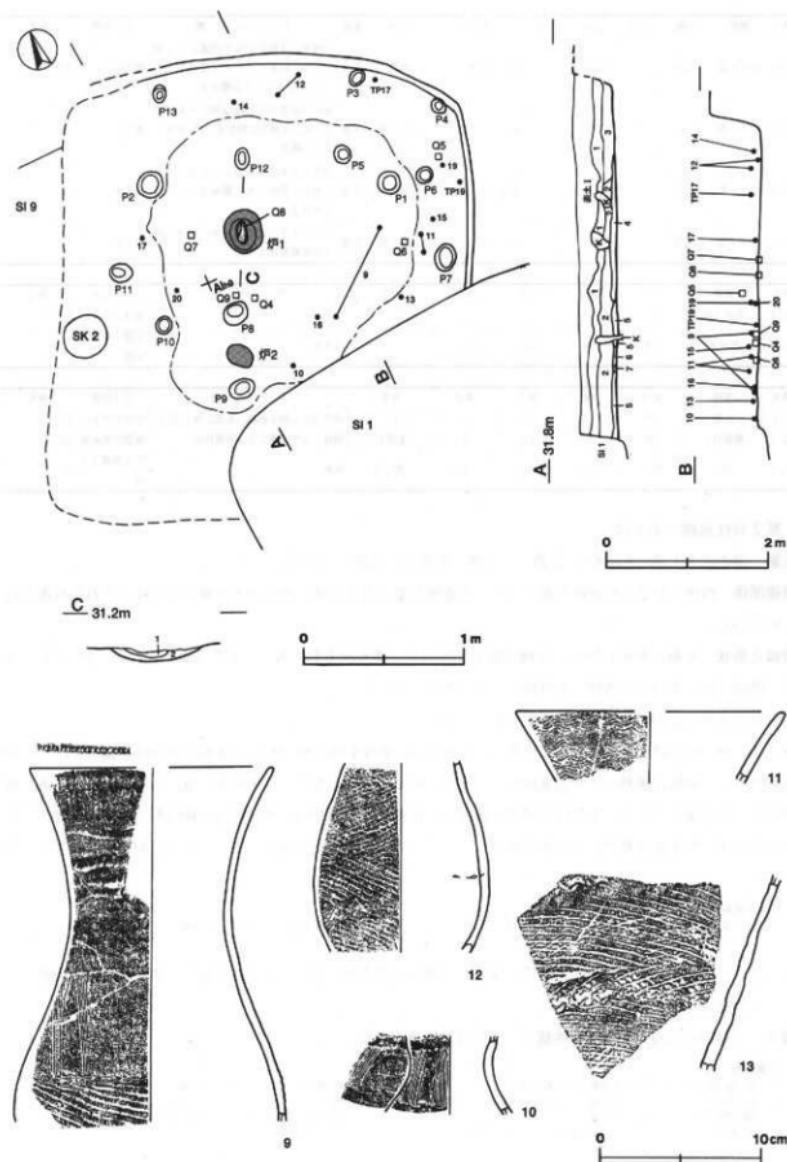
ピット 13か所。P1~P13は、配置や深さが不規則であるが、P1・P2が主柱穴と考えられ、他のピットは性格は不明である。

覆土 7層からなるレンズ状の堆積を示した自然堆積である。

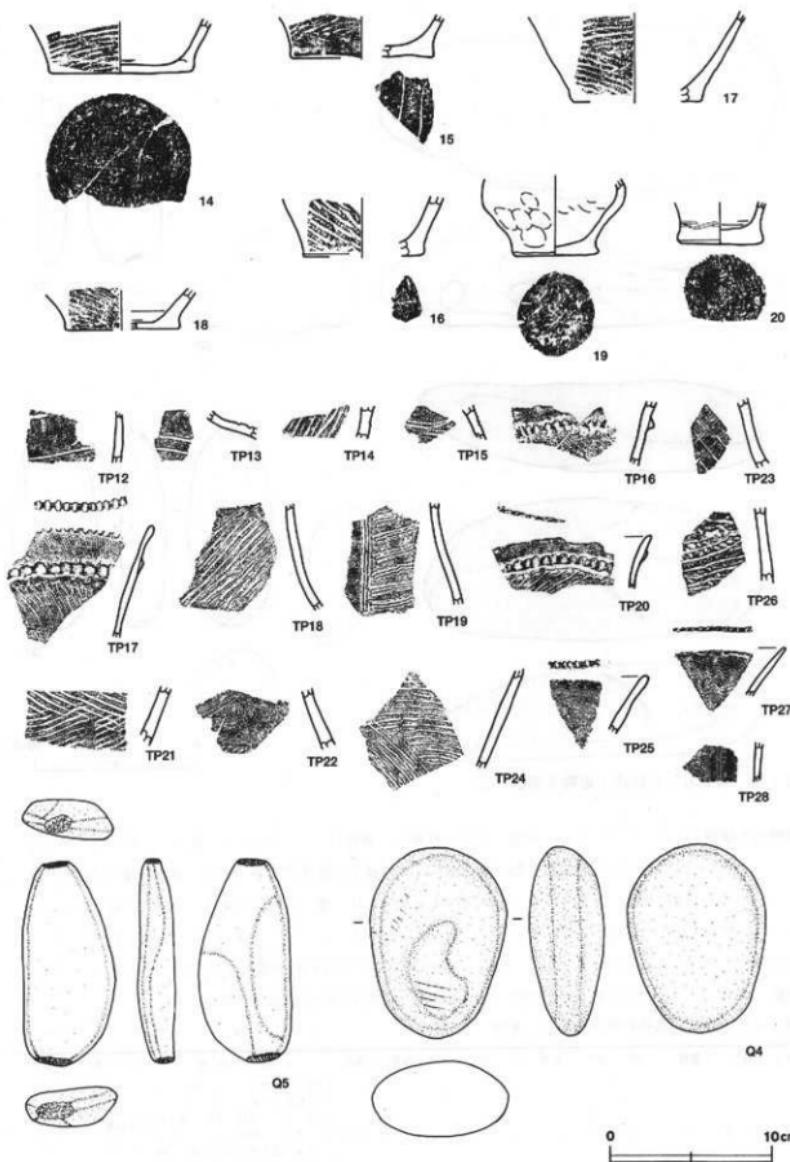
### 土層解説

1 赤褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量  
2 赤褐色 ロームブロック少量、燃土粒子・炭化粒子微量  
3 極端褐色 ロームブロック少量  
4 黒褐色 ロームブロック・燃土粒子・炭化粒子微量

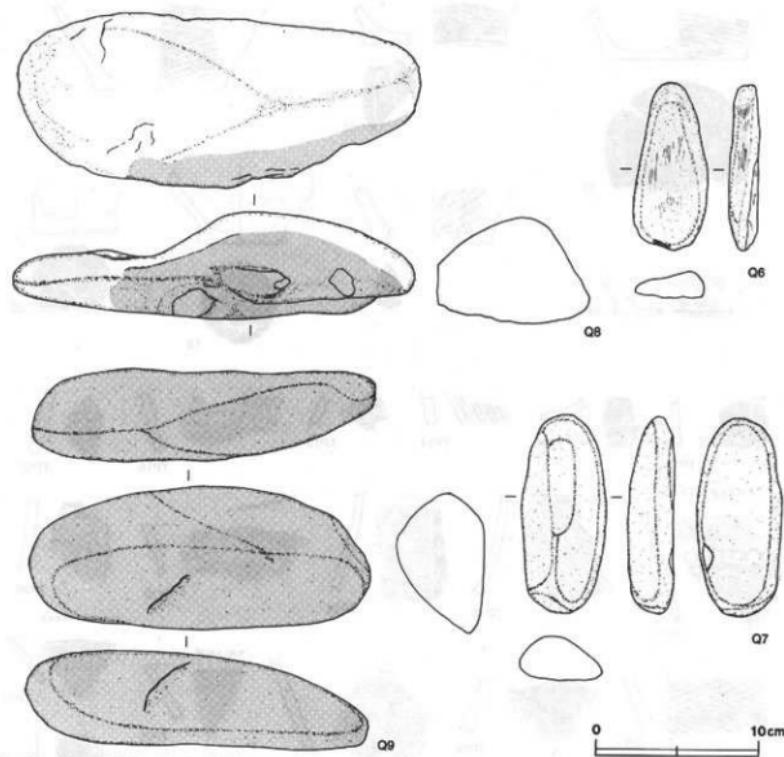
5 赤褐色 ロームブロック中量  
6 赤褐色 ロームブロック多量  
7 赤褐色 燃土ブロック多量、ロームブロック微量



第6図 第2号住居跡・出土遺物実測図



第7図 第2号住居跡出土遺物実測図（1）



第8図 第2号住居跡出土遺物実測図（2）

遺物出土状況 弥生土器片91点、土師器片18点（壺類2、甌類16）、石製品7点（磨石5、炉石2）が出土している。弥生土器はほとんどが壺形土器の副部細片で、口縁部や底部は微量である。遺物は覆土中層から床面にかけてほぼ全域に散在しており、9は中央部の床面と中央部の覆土下層から出土した破片が接合している。10は中央部の床面から正位の状態で出土している。磨石は炉1・2の間と北東部から出土し、住居内での作業空間を考える上で貴重な資料であろう。また、TP12～TP15は弥生時代中期の遺物と考えられる。

所見 時期は、出土土器や第1号住居跡との重複関係から弥生時代後期後半と考えられる。

第2号住居跡出土遺物観察表（第6～8図）

番号	種別	器種	口径	番高	底径	胎土	色調	焼成	手 法 の 特徴	出土位置	備考
9	弥生土器	広口壺	[152]	(21.8)	-	長石	におい褐	普通	口唇部はヘラ状工具による削み。口辺部は彫痕状工具（1単位3本）による波状文。口辺部と底部の境は隆起が3本あり、腹部はスリット工具による腹区画光沢波状文を施す。腹部は附加二種（附加1条）の範文が施され、羽状構成。	中央部覆土下層～床面	30%、PL.4

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備考
10	弥生土器	広口壺	-	(47)	-	石英・赤色粒子	にぶい緑	普通	腹部は1本の縦帯が基り、スリット手法による縦区画光沢横波状文(1単位6本)を施文。	中央部床面	PL 4
11	弥生土器	広口壺	[166]	(44)	-	長石・石英 赤色粒子	にぶい緑	普通	口部はハラ状工具による削み、口辺部は斜面状工具(1単位4本)による波状文。	東部中央覆土下層	
12	弥生土器	広口壺	-	(117)	-	長石・石英・小漂	にぶい緑	普通	腹部は斜面状工具による波状文。肩部は附加条二種(附加1条)の縦文が羽状に施文。	北壁中央部覆土下層	20%, PL 4
13	弥生土器	広口壺	-	(125)	-	雲母・長石・石英	にぶい黄緑	普通	腹部は附加条二種(附加1条)の縦文で羽状焼成をとり、全体腹部がみられる。	東部中央覆土下層	
14	弥生土器	広口壺	-	(32)	[8.6]	雲母・長石 石英・赤色粒子	にぶい黄緑	普通	腹部は附加条二種(附加1条)の縦文。底部木痕斑。	北壁中央覆土下層	PL 4
15	弥生土器	広口壺	-	(25)	[8.6]	長石・石英	にぶい黄緑	普通	腹部は附加条二種(附加1条)の縦文。底部木痕斑。	東部中央覆土中層	
16	弥生土器	広口壺	-	(36)	[7.0]	雲母・長石・石英	にぶい黄緑	普通	腹部は附加条二種(附加2条)の縦文。底部木痕斑。	中央部床面	
17	弥生土器	広口壺	-	(54)	[8.0]	長石・石英 赤色粒子	にぶい黄緑	普通	腹部は附加条二種(附加1条)の縦文。	西部中央床面	
18	弥生土器	広口壺	-	(24)	[7.0]	長石・石英 赤色粒子	にぶい黄緑	普通	腹部は附加条二種(附加1条)の縦文。	覆土中	
19	土師器	手裡土器	-	(48)	48	長石	にぶい黄緑	普通	外腹指振痕、内腹爪痕。	北部覆土下層	
20	土師器	甕	-	(25)	50	長石・石英 赤色粒子	にぶい緑	普通	外腹ヘラ磨き、内面ヘナナデ。	中央部床面	

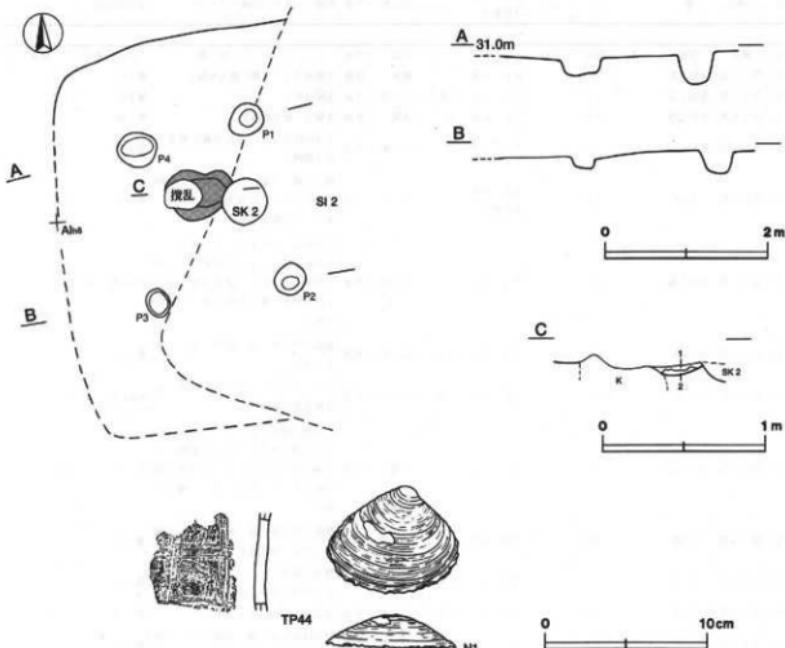
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備考
TP12	弥生土器	壺形土器	-	(30)	-	長石・石英	褐灰	普通	沈縞渦巻文。上端に縦文が施文。	覆土中	PL 7
TP13	弥生土器	壺形土器	-	(15)	-	雲母・長石・石英	にぶい緑	普通	沈縞渦巻文。	覆土中	PL 7
TP14	弥生土器	壺形土器	-	(19)	-	長石・石英	灰褐	普通	沈縞文。地文細織文。	覆土中	
TP15	弥生土器	壺形土器	-	(20)	-	雲母・石英	にぶい緑	普通	2本同時弦文具による沈縞区画文。地文細織文。	覆土中	
TP16	弥生土器	広口壺	-	(39)	-	長石・石英 赤色粒子	にぶい緑	普通	複合口縁で下端は棒状工具による押圧。その部位は附加条二種(附加1条)による縦文を施す。	覆土中	PL 7
TP17	弥生土器	壺形土器	-	(65)	-	雲母・長石	にぶい緑	普通	口部はハラ状工具による削み。口辺部は隆唇が1本逃り指頭による強い押圧がみられる。隆唇を挟んで上下に附加条二種(附加2条)の縦文が施文。	北部覆土下層	PL 7
TP18	弥生土器	広口壺	-	(60)	-	雲母・長石・石英	にぶい緑	普通	腹部は帯加条二種(附加2条)の縦文を施文。	覆土中	
TP19	弥生土器	広口壺	-	(60)	-	雲母・長石・石英	にぶい緑	普通	スリット手法による1単位5本の縦区画光沢横波状文。	東部覆土下層	PL 7
TP20	弥生土器	壺形土器	-	(32)	-	雲母・長石	灰褐	普通	口部は纏文が施され、口辺部は無文で下端に隆唇が1本逃り指頭による強い押圧がみられる。口辺部下端は附加条二種(附加1条)の縦文を施文。	覆土中	PL 7
TP21	弥生土器	広口壺	-	(34)	-	雲母・長石・石英	にぶい緑	普通	腹部は附加条二種(附加1条)の縦文を施文。羽状横波。	覆土中	
TP22	弥生土器	広口壺	-	(35)	-	雲母・長石・石英	にぶい緑	普通	腹部は棒状工具による山文。腹部と颈部の境は沈縞文による区画。	覆土中	
TP23	弥生土器	広口壺	-	(40)	-	雲母・長石・石英	にぶい緑	普通	沈縞による格子目文。	覆土中	PL 7
TP24	弥生土器	広口壺	-	(61)	-	長石・石英	にぶい緑	普通	腹部は附加条二種(附加1条)の縦文を施文。	覆土中	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP25	弥生土器	広口壺	-	(3.5)	-	石英	にぶい橙	普通	口唇部はヘラ状工具による削み。口 近部は彫痕状工具（1単位6本）による波状文。	覆土中	
TP26	弥生土器	広口壺	-	(4.5)	-	雪母・長石・石英	にぶい橙	普通		覆土中	
TP27	弥生土器	広口壺	-	(3.0)	-	長石・石英	にぶい黄	普通	口唇部はヘラ状工具による削み。口 近部は彫痕状工具（1単位4本）による波状文。	PL 7	
TP28	弥生土器	広口壺	-	(2.2)	-	長石	にぶい橙	普通	スリット手法による腹区画充填波状文。	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 4	磨石	116	84	46	415	砂岩	片面研磨痕。	中央部覆土下層	PL 6
Q 5	磨石	125	57	23	206.1	砂岩	片面研磨痕。	東部北覆土上層	PL 6
Q 6	磨石	102	44	16	1029	砂岩	片面研磨痕。両端部敲打痕。	東部中央覆土下層	PL 6
Q 7	磨石	122	53	28	2524	緑色凝灰岩	全面研磨痕。	中央部床面	PL 6
Q 8	炉石	249	107	65	1758.4	砂岩	被熱。	炉1覆土上層	
Q 9	炉石	21.1	88	58	1345.6	砂岩	被熱。	中央部床面	PL 6

### 第9号住居跡（第9図）

位置 調査区中央部のA1g8区に位置し、台地の平坦部に立地している。



第9図 第9号住居跡・出土遺物実測図

重複関係 東部の大部分を第2号住居跡に掘り込まれている。

規模と形状 長軸は推定4.80m、短軸は第2号住居跡に掘り込まれているため、確認できたのは2.52mで、隅丸方形または隅丸長方形と考えられ、主軸方向はN-0°である。遺構確認の時点で床面が確認されたため壁高は確認できなかった。

床 ほぼ平坦である。硬化面は確認できなかった。

炉 1か所。ほぼ中央部に位置し、東部を第2号土坑、中央部を擾乱によりそれぞれ掘り込まれている。長径87cm、短径55cmの不整椭円形で、床面を8cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は一部擾乱を受けているが、残存部分は被熱により赤変硬化している。

#### 伊士層解説

1 黒褐色 無土ブロック・炭化粒子微量

2 赤褐色 無土ブロック中量、ロームブロック少量

ピット 4か所。P1は深さ40cm、P2は深さ29cm、P3は深さ12cm、P4は深さ18cmで、配置から主柱穴に相当すると考えられる。

覆土 遺構確認の時点で床面が確認されたため不明である。

遺物出土状況 弥生土器片38点、土師器片9点（杯類1、甌類8）、貝製品1点（貝刃）が出土している。遺物は少なく、覆土中からTP44とN1が出土している。

所見 遺物はいずれも覆土中からの出土であり、時期特定は困難であるが、第2号住居跡との重複関係から弥生時代後期と考えられる。

第9号住居跡出土遺物観察表(第9図)

番号	種別	器種	口径	唇高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP44	弥生土器	広口壺	-	(6.0)	-	長石・石英	褐	普通	輪曲工具(1単位4本)による腹部の輪曲文。腹部と側部の境は横走文により区隔。	覆土中	PL7
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴			出土位置	備考
N1	貝刃	6.5	8.0	2.0	275	ハマグリ	側縁に刃部作成。全面磨耗。			覆土中	PL5

表2 弥生時代竪穴住居跡一覧表

住居跡 番号	位置	主軸方向 (長軸方向)	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	内部施設			覆土	主な出土遺物	備考 (時期)
							壁幕	主柱穴	ピット			
1	A1g9	N-23°-E	[隅丸方形・ 隅丸長方形]	4.90×(3.02)	6~16	平坦	—	2	2	—	自然 土壁、軽微車、石繩、指 標具カ	弥生時代後期後半 SI2→本級→SI3・SI5
2	A1g9	N-29°-E	[隅丸長方形]	[5.70×5.06]	16~36	平坦	—	—	13	炉2	自然 炉石	弥生土器(広口壺)、甌石、 火石 SI3→本級→SI1・SK2
9	A1g8	N-0°	[隅丸方形・ 隅丸長方形]	[4.80]×[2.52]	—	平坦	—	4	—	炉1	不明	弥生土器(広口壺)、貝刃 本級→SI2・SK2

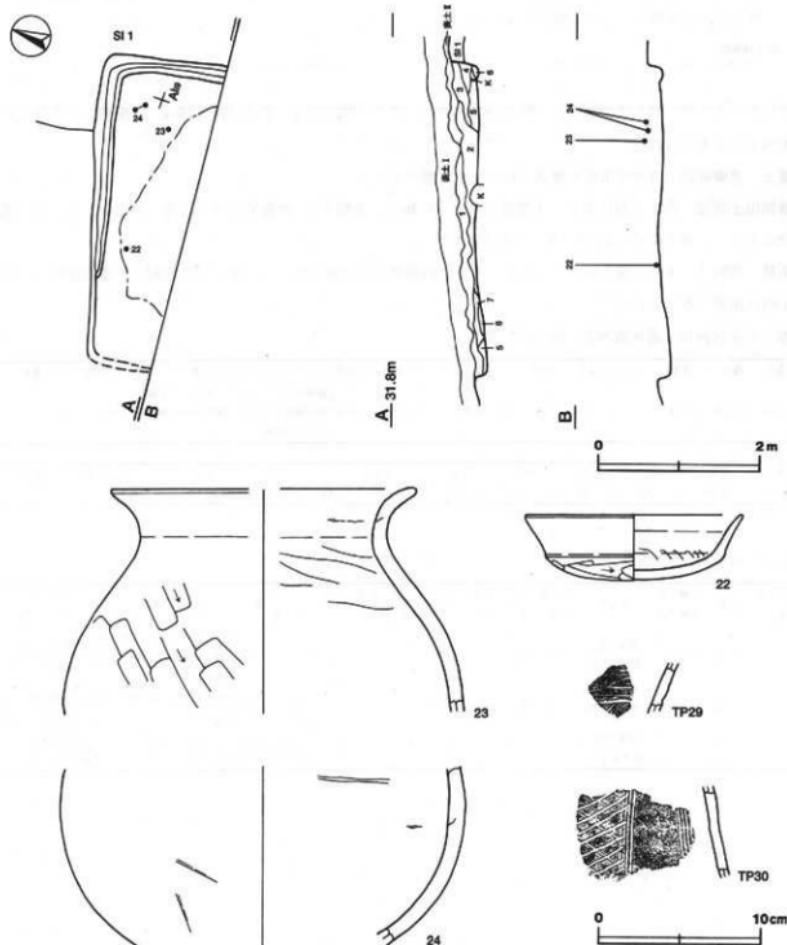
## 2 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査で、竪穴住居跡 6 軒、土坑 1 基を確認した。以下、検出された遺構及び遺物について記載する。

### (1) 竪穴住居跡

#### 第3号住居跡（第10図）

位置 調査区南部のA11i8区に位置し、台地の平坦部に立地している。



第10図 第3号住居跡・出土遺物実測図

**重複関係** 北東部で第1号住居跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長軸は3.84m、短軸は調査区域外に延びるため、確認できたのは1.52mで、方形または長方形と考えられ、主軸方向はN-75°-Eである。壁高は16~30cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

**床** ほぼ平坦で、中央部の広い範囲が踏み固められている。壁溝は北壁半分と東壁に沿って巡っている。

**遺** 検出されていない。

**ピット** 検出されていない。

**覆土** 8層からなるレンズ状の堆積を示した自然堆積である。第6層は壁溝の土層である。

**土層解説**

1	赤	褐色	ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	5	褐	色	ロームブロック多量		
2	暗	褐色	ロームブロック中量、焼土ブロック・炭化粒子微量	6	褐	色	ロームブロック中量、炭化粒子微量		
3	板	暗	褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量	7	暗	赤	褐色	焼土ブロック多量、ロームブロック微量
4	褐	褐色	ロームブロック中量	8	に	ぶ	赤褐色	ロームブロック中量、焼土粒子少量	

**遺物出土状況** 弥生土器片18点、土師器片29点（坏類4、甕類25）が出土している。遺物は北東部の覆土上層から床面にかけて散在している。22は北壁中央部付近の床面から出土している。図示した弥生土器片はいずれも覆土中からの出土であり、流れ込みと思われる。

**所見** 時期は、出土土器から6世紀前葉と考えられる。

第3号住居跡出土遺物観察表（第10図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
22	土師器	坏	13.6	4.0	-	雲母	明赤褐	普通	体部外面ヘラ削り、内面ヘラナダ。	北部中央床面	60%, PL.4
23	土師器	甕	[19.0]	(13.7)	-	雲母・石英	にぶい橙	普通	体部外面ヘラ削り、内面ヘラナダ。胎模引抜き。	北部覆土上層	10%
24	土師器	甕	-	(11.0)	-	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面ナダ、内面ヘラナダ。胎模引抜き。	北部覆土上層	5%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
TP29	弥生土器	磁器土器	-	(3.0)	-	黄土	棕	普通	沈縫が数条あり、沈縫によって区画され、区画内に構文施文。	覆土中	
TP30	弥生土器	広口甕	-	(5.5)	-	黄土・石英・小礫	棕	普通	スリット手法による縦区画充填格子目文。	覆土中	PL.7

第4号住居跡（第11図）

**位置** 調査区東部のA1h0区に位置し、台地の平坦部に立地している。

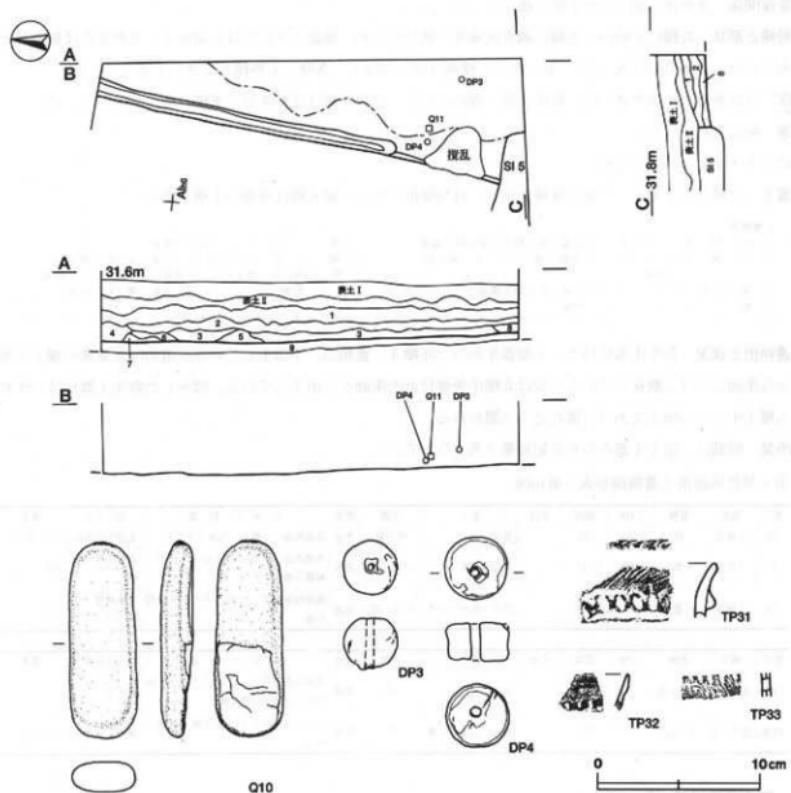
**重複関係** 南部を第5号住居跡に掘り込まれている。

**規模と形状** 住居範囲が調査区域外に延びているため、確認できたのは長軸5.34m、短軸1.30mで、方形または長方形と考えられ、主軸方向はN-6°-Eである。壁高は30~40cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

**床** ほぼ平坦で、貼り床をしており、広い範囲が踏み固められている。壁溝は西壁の一部で確認できた。

**遺** 検出されていない。

**ピット** 検出されていない。



第11図 第4号住居跡・出土遺物実測図

覆土 9層からなり、第1～4層は層位に乱れがないことから自然堆積と考えられる。第5～7層は不規則な堆積状況から人為堆積と考えられる。第9層は貼り床の土層である。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	6 褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量	7 暗褐色 焼土ブロック多量、ロームブロック微量
3 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量	8 褐色 ロームブロック微量
4 横暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量	9 明褐色 ロームブロック多量
5 関色 ロームブロック中量	

遺物出土状況 弥生土器細片35点、土師器片44点(坏類4、甕類40)、土製品2点(球状土錐1、紡錘車1)、石製品1点(敲石)が出土している。遺物は細片がほとんどであるため図示できなかった。弥生土器片はいずれも覆土中からの出土であり、流れ込んだものである。

所見 遺物が細片のため時期特定は困難であるが、出土土器や、第5号住居跡との重複関係などから6世紀前葉と考えられる。

第4号住居跡出土遺物観察表（第11図）

番号	種別	器種	口径	断高	底径	胎土	色調	施成	手法の特徴	出土位置	備考
TP31	弥生土器	広口壺	-	(3.2)	-	石英	にぶい橙	普通	口唇部はヘラ状工具による削みが施され、口辺部は附加条二種（附加1条）の縦文が施され、その下に指痕による隆筋が1条ある。	覆土中	PL7
TP32	弥生土器	広口壺	-	(2.4)	-	雲母・長石	灰褐	普通	口唇部はヘラ状工具による削みが施され、1段の複合口縁。口辺部は指彫による隆筋が1条ある。	覆土中	
TP33	弥生土器	広口壺	-	(1.5)	-	長石・石英	棕	普通	附加条一種（附加1条）の縦文を描文後、棒状工具による刺穴。	覆土中	

番号	器種	長さ	幅(往)	孔径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP3	球状土錐	3.2	3.4	0.4	33.3	-	球体、外面ナデ。	南部中央覆土上層	PL5
DP4	軽鍵車	2.4	3.8	0.5	41.5	-	外面ナデ。	西南部覆土中層	PL5

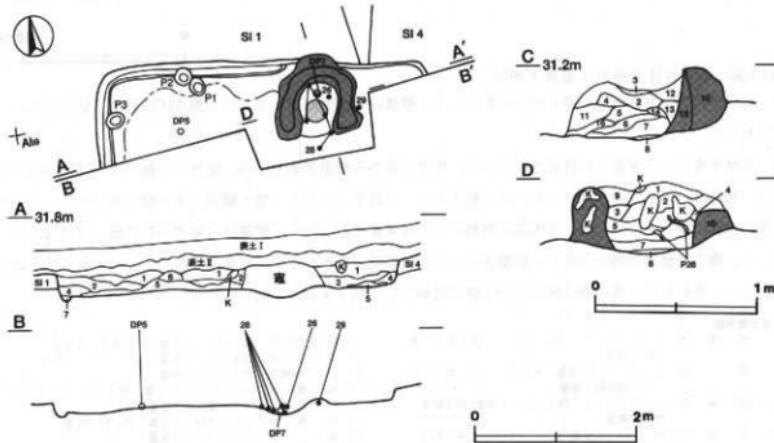
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q10	鐵石	12.0	4.2	2.0	(153.9)	砂岩	端部敲打痕。	西南部覆土中層	PL6

第5号住居跡（第12図）

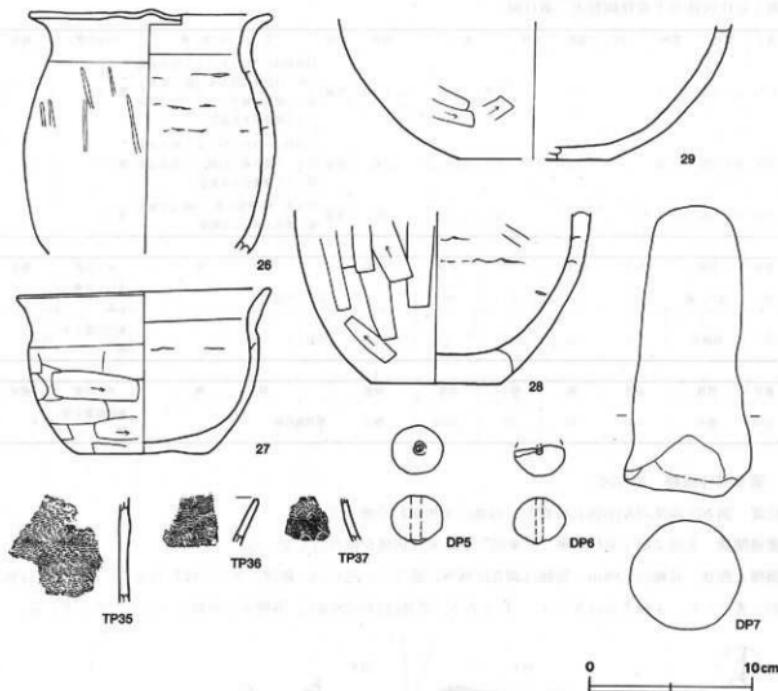
位置 調査区南部のA119区に位置し、台地の平坦部に立地している。

重複関係 北部で第1号住居跡、北東部で第4号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸は4.08m、短軸は調査区域外に延びているため、確認できたのは1.12mで、方形または長方形と考えられ、主軸方向はN-9°-Eである。壁高は24~28cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。



第12図 第5号住居跡実測図



第13図 第5号住居跡出土遺物実測図

床 ほぼ平坦で、北西部分が踏み固められている。壁溝は西半分に巡っており、調査区域外にも延びるものと思われる。

竈 北壁中央のやや東寄りに付設されており、焚き口部から煙道部まで78cm、壁外への掘り込みは10cmほどである。袖部は、床面と同じ高さの地山面に粘土を貼て構築しており、竈土層図の第10層が相当する。火床部は浅い皿状に掘りくぼめられ、火床面は被熱により赤変硬化しており、煙道は火床部から外傾して立ち上がっている。竈の土層は18層から成り、堆積状況から自然堆積と思われる。天井部は崩落しており、第5・6層が相当すると思われる。第15層は掘り方の土層で暗褐色土に粘土を混ぜて貼っている。

#### 竈土層解説

- |          |                                |           |                                |
|----------|--------------------------------|-----------|--------------------------------|
| 1 焼 褐 色  | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量     | 8 焼 赤 褐 色 | 焼土ブロック多量、炭化粒子・灰微量              |
| 2 焼 褐 色  | ロームブロック中量、焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量 | 9 焼 褐 色   | 粘土ブロック中量、ロームブロック微量             |
| 3 焼 褐 色  | ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量   | 10 にぶい黄褐色 | 粘土ブロック多量                       |
| 4 焼 褐 色  | 粘土ブロック少量、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量   | 11 焼 褐 色  | ロームブロック少量、焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量 |
| 5 にぶい黄褐色 | 粘土ブロック多量、焼土ブロック少量              | 12 焼 褐 色  | ロームブロック少量、焼土粒子微量               |
| 6 明赤褐 色  | 焼土ブロック・粘土ブロック多量、炭化粒子少          | 13 焙 褐 色  | ロームブロック多量                      |
| 7 暗 褐 色  | 量、ローム粒子微量                      | 14 焙 褐 色  | ロームブロック少量、焼土粒子・粘土粒子微量          |
|          | ブロック微量                         | 15 焙 褐 色  | ロームブロック少量、焼土ブロック・粘土ブロック微量      |
|          |                                | 16 焙 褐 色  | 焼土ブロック・粘土ブロック少量、ロームブロック・炭化粒子微量 |

**ピット** 3か所。配置や深さが不規則であるため、性格は不明である。

**覆土** 7層からなるブロック状の堆積を示した人為堆積である。第7層は壁溝の土層である。

#### 土壤解説

1	暗 褐色	ロームブロック少量、焼土ブロック微量	5	暗 褐色	ロームブロック中量、粘土粒子微量
2	暗 褐色	ロームブロック中量、炭化粒子微量	6	ぶい黄褐色	粘土ブロック中量、ロームブロック少量、焼土 粒子・炭化粒子微量
3	黒 褐色	炭化粒子少量、ロームブロック・焼土粒子微量	7	褐 色	ロームブロック中量
4	褐 色	ロームブロック中量、焼土粒子微量			

**遺物出土状況** 赤生土器片28点、土器片41点(灰陶3、甕陶38)、土製品3点(球状土錠2、支脚1)、石製品1点(剥片)が出土している。遺物は窓内や北西部の覆土中層から床面にかけて出土している。DP7は窓の火床部から直立した状態で出土し、本来の位置を保ったままの状況を示している。また、窓内からは26が正位の状態で、28が散らばった状態で出土しており、窓の土層が自然堆積を示していることから、遺棄されたものと想定される。赤生土器片はいずれも覆土中からの出土であり、混入と思われる。

**所見** 時期は、床面及び窓内の出土土器から6世紀中葉から後葉と考えられる。

第5号住居跡出土遺物観察表(第13図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	造成	手法の特徴	出土位置	備考
26	土師器	甕	14.8	(14.7)	-	雲母・長石・石英	灰褐色	普通	体部外側へラナデ、内面へラ磨き、輪積模様、口縁部指痕。	電覆土下層	60%, PL4
27	土師器	甕	15.7	10.1	8.1	長石・石英	ぶい黄褐色	普通	体部外側へラ削り、内面ナデ、輪積模様。	電覆土中	90%, PL4
28	土師器	甕	-	(10.5)	8.0	雲母・長石・石英	灰褐色	普通	体部外側へラ削り、内面へラナデ、輪積模様。	電覆土下層～火床部	40%
29	土師器	甕	-	(8.5)	[9.4]	雲母・長石・石英	ぶい黄褐色	普通	体部外側へラ削り、内面牽引。	窓付近床面	10%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	造成	手法の特徴	出土位置	備考
TP35	赤生土器	広口壺	-	(6.5)	-	長石・石英	ぶい黄褐色	普通	櫛歯状工具(1単位4本)による波状文。	覆土中	
TP36	赤生土器	広口壺	-	(3.0)	-	長石	ぶい黄褐色	普通	櫛歯状工具(1単位4本)による波状文。	覆土中	
TP37	赤生土器	広口壺	-	(2.6)	-	長石・石英	ぶい黄褐色	普通	櫛歯状工具(1単位3本)による波状文。	覆土中	

番号	器種	長さ	幅(径)	孔径	重量	材質	特 徴	出 土 位 置	備 考
DP5	壁状土錠	30	29	0.6	25.3	-	達体、外面ナデ。	北側床面	PL5
DP6	壁状土錠	(28)	32	0.4	(13.3)	-	達体、外面ナデ。	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出 土 位 置	備 考
DP7	支脚	17.9	7.7	6.6	672.9	-	ナゲ、被熱。	窓火床部	

第6号住居跡(第14図)

**位置** 調査区中央部のA1h7区に位置し、台地の平坦部に立地している。

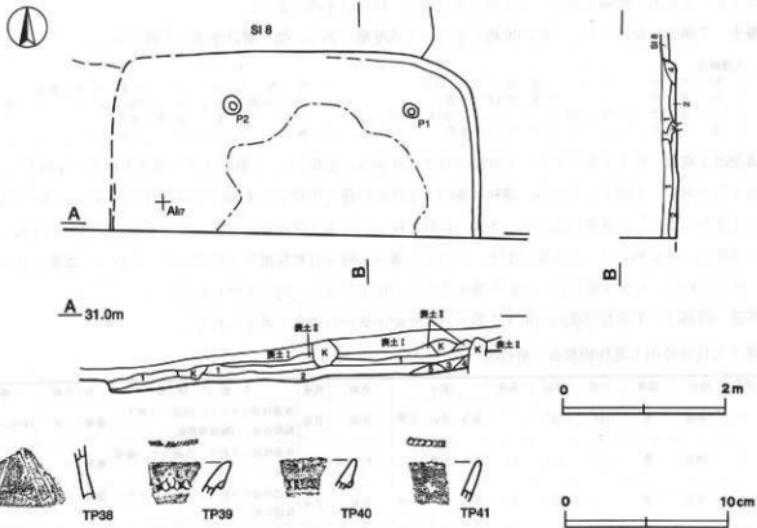
**重複関係** 北部で第8号住居跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長軸は推定4.60m、短軸は調査区域外に延びるため、確認できたのは2.20mで、隅丸方形または隅丸長方形と考えられ、主軸方向はN-88°-Wである。壁高は11~19cmで、各壁とも外傾して立ち上がっていいる。

**床** ほぼ平坦で、中央部分が踏み固められている。

**窓** 検出されていない。

**ピット** 2か所。P1は深さ28cm、P2は深さ24cmで、配置から主柱穴に相当すると考えられる。



第14図 第6号住居跡・出土遺物実測図

**覆土** 5層からなるレンズ状の堆積を示した自然堆積である。

土層解説

- 1 細褐色 ロームブロック微量
- 2 細褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量

- 4 褐色 ロームブロック中量
- 5 褐色 ロームブロック中量、炭化粒子微量

**遺物出土状況** 弥生土器片21点、土師器片14点（壺2、甕類12）、石製品1点（剥片）が出土している。本跡に伴う遺物はほとんどが細片であり、図示できなかった。弥生土器片は覆土中からの出土であり、流れ込みと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器や第8号住居跡を掘り込んでいることから6世紀代と考えられる。

第6号住居跡出土遺物観察表（第14図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP38	弥生土器	広口壺	-	(3.2)	-	長石・石英	灰褐色	普通	輪廓状工具（1単位3本）による山形文。	覆土中	PL7
TP39	弥生土器	広口壺	-	(2.1)	-	長石	灰褐色	普通	口唇部は櫛文が施され、1段の複合口縁で下端は棒状工具による押圧。	覆土中	
TP40	弥生土器	広口壺	-	(1.6)	-	雲母・長石	褐色	普通	口唇部は櫛文が施され、1段の複合口縁で下端は棒状工具による押圧。	覆土中	
TP41	弥生土器	広口壺	-	(2.4)	-	雲母・長石	灰褐色	普通	口唇部はヘラ状工具による削みが施され、口辺部は輪廓状工具（1単位6本）による波状文。	覆土中	PL7

### 第7号住居跡（第15図）

**位置** 調査区西部のA1h5区に位置し、台地の平坦部に立地している。

**規模と形状** 調査区外に延び、確認できたのは長軸2.49m、短軸0.98mで、方形または長方形と考えられ。主軸方向はN-4°-Wである。壁高は26~38cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

**床** ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

**竈** 検出されていない。

**ピット** 検出されていない。

**覆土** 6層からなり、壁際が三角形状の堆積状態を示していることから、自然堆積である。

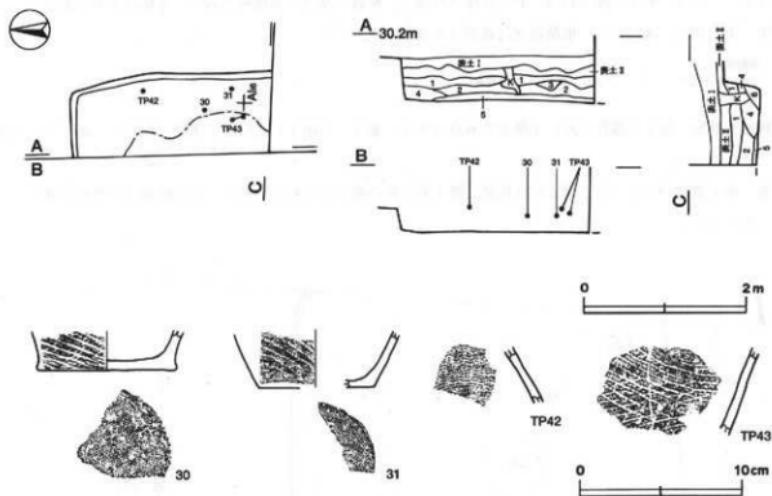
#### 土層解説

1 黒褐色	炭化粒子少量	ロームブロック微量
2 前褐色	ロームブロック少量	5 灰褐色
3 黑褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	6 黑褐色

4 極端褐色	ロームブロック微量
5 灰褐色	ロームブロック少量
6 黑褐色	ロームブロック微量

**遺物出土状況** 弓生土器片21点、土師器片18点（坏類6、甕類12）、石製品1点（剥片1点）が出土している。遺物は少なく、覆土中層からの出土が多い。30、31、TP43は東部の覆土中層、TP42は北東部の覆土中層からそれぞれ出土しており、流れ込みと考えられる。

**所見** 時期は、出土土器から6世紀前葉と考えられる。



第15図 第7号住居跡・出土遺物実測図

### 第7号住居跡出土遺物観察表（第15図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	施成	手法の特徴	出土位置	備考
30	弥生土器	広口壺	-	(24) [86]	長石・石英	橙	普通	剥片は附加条二種（附加1条）の構文。底部布目底。	東部中央覆土中層	5%	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
31	弥生土器	広口壺	-	(35)	[72]	長石・石英 赤色粒子	にぶい黄褐色	普通	頭部は附加条二種(附加1条)の縦文。 底部布目紋。	東部中央覆土 中層	5%
TP42	弥生土器	広口壺	-	(32)	-	雲母・長石	にぶい褐色	普通	頭部は波状文が通り、腹部と底部の 境は櫛齒状工具(1単位4本)によ る溝型文。	東部中央覆土 中層	PL?
TP43	弥生土器	広口壺	-	(50)	-	長石・小穂	にぶい褐色	普通	附加条二種(附加1条)の縦文。羽状 構成。	東部中央覆土 中層	

### 第8号住居跡(第16図)

位置 調査区中央部のA1h7区に位置し、台地の平坦部に立地している。

重複関係 南部を第6号住居跡、西部を第1号溝、中央部を第1号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.80m、短軸は調査区域外に延びるため、確認できたのは3.28mで、隅丸方形または隅丸長方形と考えられ、主軸方向はN-88°-Wである。壁高は8~10cmで、壁の立ち上がりは壁高が低いため明確には確認できなかった。

床 ほぼ平坦で、南東部の一部が踏み固められている。

竈 検出されていない。

ピット 2か所。P1は深さ48cm、P2は深さ34cmで、配置や深さが不規則であり、性格は不明である。

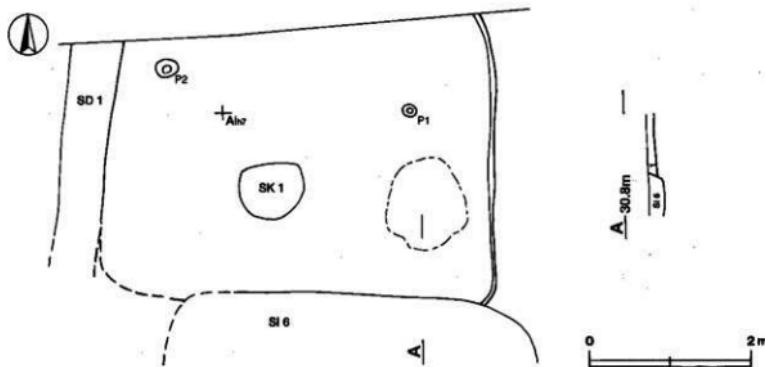
覆土 単一層で、薄いため、堆積状況は確認できなかった。

#### 土層解説

I 黄褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量

遺物出土状況 弥生土器片4点、土器片6点(壺3、甕3)が出土している。遺物は少なく、細片のため図示できなかった。

所見 出土遺物は少ないが、第6号住居跡、第1号土坑に掘り込まれていることから時期は6世紀前葉から中期と考えられる。



第16図 第8号住居跡実測図

表3 古墳時代竪穴住居跡一覧表

住居跡 番号	位 置	主軸方向 (長軸方向)	平面形	規 模 (m) (長軸×短軸)	壁 高 (cm)	床 面	内部施設			覆土	主な出土遺物	備 考 (時期)
							壁構	主柱穴	ピット			
3	A 1b6	N-75°-E	[方形・長方形]	3.84×(1.52)	16~30	平坦	一部	—	—	自然	土器器(环・甕)	6世紀前葉 SI1→本跡
4	A 1h0	N-6°-E	[方形・長方形]	(5.34×1.30)	30~40	平坦	一部	—	—	自然 人為	土器器(环・甕), 球状土器, 鍵, 防衛車, 故石	6世紀前葉 本跡→SI5
5	A 1b9	N-9°-E	[方形・長方形]	4.08×(1.12)	24~28	平坦	一部	—	3	覆土	土器器(甕), 球状土器, 人為	6世紀中葉~後葉 SI1→SI4→本跡
6	A 1h7	N-98°-W	[圓丸方形・ 隅丸長方形]	(4.60×2.20)	11~19	平坦	—	2	—	自然	土器器(环・甕)	6世紀代 SB6→本跡
7	A 1h5	N-4°-W	[方形・長方形]	(2.49×0.98)	26~38	平坦	—	—	—	自然	土器器(环・甕)	6世紀前葉
8	A 1h7	N-88°-W	[圓丸方形・ 隅丸長方形]	(4.80×3.28)	8~10	平坦	—	2	—	不明	土器器(环・甕)	6世紀前葉~中葉 本跡→SI6-SI1→SI1

## (2) 土坑

## 第1号土坑(第17図)

位置 調査区中央部のA1h7区に位置し、台地の平坦部に立地している。

重複関係 第8号住居跡の中央部を掘り込んでいる。

規模と形状 長径0.84m、短径0.64mの梢円形であり、長径方向はN-90°-Wである。深さは30cmで、底面は皿状で壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3層からなるレンズ状の堆積を示した自然堆積である。

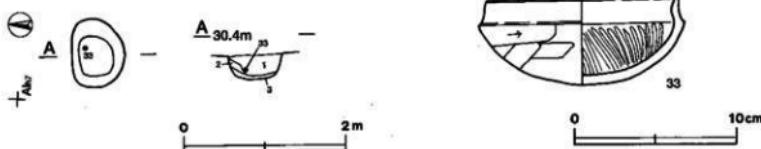
## 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量  
2 暗褐色 ロームブロック中量

- 3 黄色 ロームブロック多量

遺物出土状況 土器器片5点(甕)が出土している。遺物は北東部の覆土中層に集中しており、33は北東部の覆土中層から正位の状態で出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀前葉と考えられる。



第17図 第1号土坑・出土遺物実測図

## 第1号土坑跡出土遺物観察表(第17図)

番号	種別	断面	口径	壁高	底径	胎土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備考
33	土器器	环	11.8	53	—	墨色・灰石 石英・赤色粒子	淡黄褐	普通	体部外表面へ剥離。内面へ剥離。	北東部覆土 中層	100%, PL4

### 3 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期が明確でない土坑1基、溝跡1条を確認した。以下、検出された遺構及び遺物について記載する。

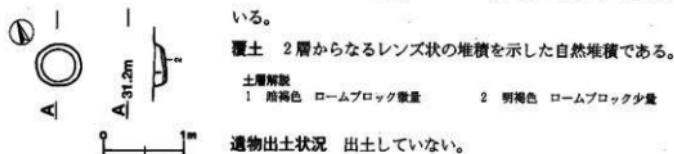
#### (1) 土坑

##### 第2号土坑（第18図）

位置 調査区中央部のA1g8区に位置し、台地の平坦部に立地している。

重複関係 第2号住居跡の西部中央を掘り込んでいる。

規模と形状 長径0.54m、短径0.52mの円形である。深さは14cmで、底面は平坦で壁は外傾して立ち上がって



第18図 第2号土坑実測図

いる。

覆土 2層からなるレンズ状の堆積を示した自然堆積である。

##### 土層解説

1 黒褐色 ロームブロック多量

2 明褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 出土していない。

所見 出土遺物がないため、時期は不明であるが、弥生時代後半の第2号住居跡を掘り込んでいることから、それ以降と考えられる。

#### (2) 溝跡

##### 第1号溝（第19図）

位置 調査区西部のA1h6区に位置し、台地の平坦部に立地している。

重複関係 第8号住居跡の西部を掘り込んでいる。

規模と形状 南北方向（N - 8° - E）に、直線的に延びている。深さは16~20cmで、確認できた長さは2.50

mであり、上幅0.54~0.62m、下幅0.40~0.48m、断面形はU字状を呈している。

覆土 4層からなるブロック状の堆積を示した人為堆積である。

##### 土層解説

1 黒褐色 ローム粘土多量 3 暗褐色 ロームブロック中量

2 暗褐色 ロームブロック少量 4 暗褐色 ロームブロック多量

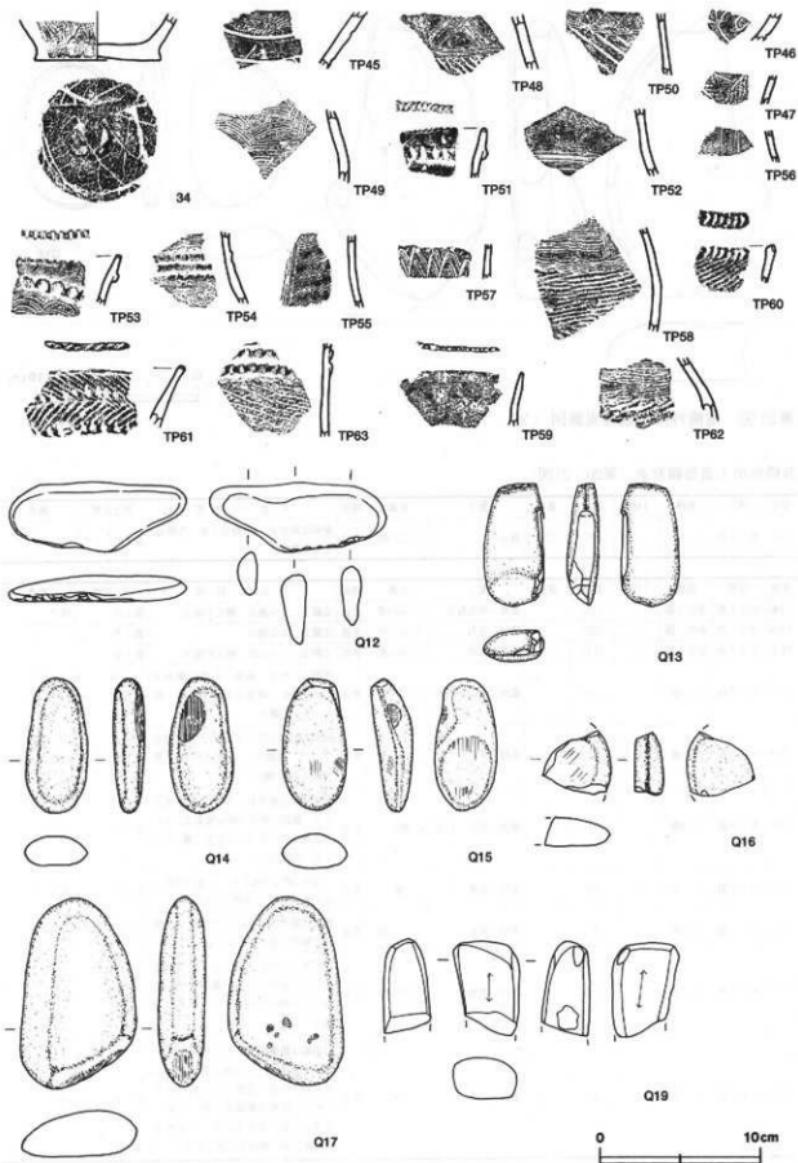
遺物出土状況 出土していない。

所見 出土遺物がないため、時期は不明であるが、6世紀前葉から中葉の第8号住居跡を掘り込んでいることから、それ以降と考えられる。

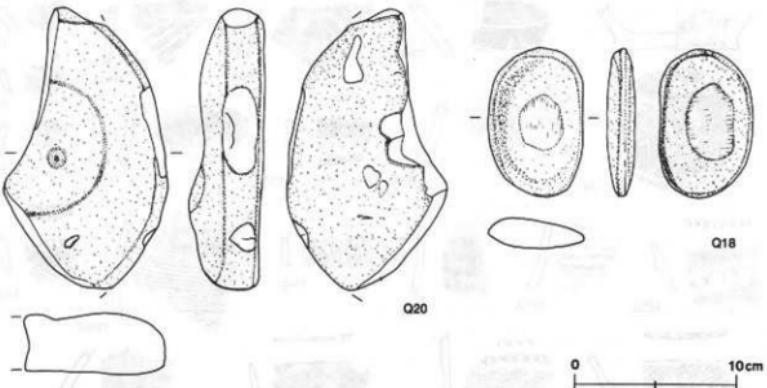
第19図 第1号溝実測図

#### (3) 遺構外出土遺物

今回の調査で出土した遺構に伴わない主な遺物について遺物観察表で記述する。



第20図 遺構外出土遺物実測図（1）



第21図 遺構外出土遺物実測図（2）

遺構外出土遺物観察表（第20・21図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
34	弥生土器	広口壺	-	(2.7)	(7.8)	長石	にぶい緑	普通	腹部は附加条一様(附加2条)の縄文。	表土中	5%
									底部木痕痕。		
TP45	弥生土器	壺形土器	-	(3.5)	-	雲母・赤色粘子	にぶい緑	普通	沈縄文による区画。縄文が施文。	表土中	PL7
TP46	弥生土器	壺形土器	-	(2.0)	-	雲母・長石	にぶい緑	普通	沈縄文による区画。	表土中	
TP47	弥生土器	壺形土器	-	(1.7)	-	長石・石英	にぶい緑	普通	沈縄文による区画。縄文が施文。	表土中	
TP48	弥生土器	広口壺	-	(3.3)	-	雲母・長石・石英	にぶい緑	普通	腹部は山形文。肩部との境は横走文で区画され。肩部は附加条一様(附加2条)の縄文。	表土中	PL7
TP49	弥生土器	広口壺	-	(4.3)	-	雲母・長石	にぶい緑	普通	腹部は横走文で区画され。肩部は附加条二様(附加1条)の縄文。	表土中	PL7
TP50	弥生土器	広口壺	-	(3.7)	-	雲母・長石・石英	褐色	普通	腹部は縦区画され、格子目文が施される。肩部と腹部の境は横走文によつて区画され。肩部は附加条二様(附加1条)の縄文。	表土中	PL7
TP51	弥生土器	広口壺	-	(2.9)	-	雲母・石英	緑	普通	口唇部は横走文が施され、1本の隆起が施される。口唇部と腹部の境は横走文によつて区画され。腹部は横走文による区画。	表土中	PL7
TP52	弥生土器	広口壺	-	(4.0)	-	雲母・長石	にぶい緑	普通	腹部は横走文による区画。肩部と腹部の境は横走文によって区画。	表土中	PL7
TP53	弥生土器	広口壺	-	(3.1)	-	雲母・褐鐵	褐色	普通	口唇部はへう状工具による刮みが施され、口唇部は1本の隆起が返り指頭による押圧がみられる。下端は遮弧文。	表土中	PL7
TP54	弥生土器	広口壺	-	(4.3)	-	長石・石英	灰褐色	普通	口唇部は櫛齒状工具（1単位4本）による波状文。口唇部と腹部の境は腹側が2本沿じ指頭による押圧がみられる。腹部は櫛齒状工具（1単位4本）による波状文によって区画され。腹側の縦縫文が施される。	表土中	PL7

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	洗成	手 法 の 特 徴	出土位置	備考
TP55	弥生土器	広口壺	-	(45)	-	長石・石英	褐灰	普通	縦区画の彫挫文が施され、櫛歯状工具(1単位4本)による波状文が延びる。	表土中	PL 7
TP56	弥生土器	広口壺	-	(20)	-	雲母・石英	にぶい褐	普通	スリット手法による縦区画光埴波状文。	表土中	PL 7
TP57	弥生土器	広口壺	-	(20)	-	長石・石英	褐灰	普通	櫛歯状工具(1単位6本)による波状文。	表土中	
TP58	弥生土器	広口壺	-	(65)	-	雲母・石英・小槽	にぶい褐	普通	頭部はスリット手法による縦区画光埴波状文。肩部と下縁は波状文で区画され、肩部は附加条二種(附加1条)の縄文。	表土中	PL 7
TP59	弥生土器	広口壺	-	(32)	-	雲母・石英	にぶい褐	普通	口唇部は縄文が施され、口辺部は櫛歯状工具(1単位6本)の波状文。	表土中	PL 7
TP60	弥生土器	広口壺	-	(23)	-	長石・石英	褐	普通	口唇部はヘラ状工具による划みが施され、口辺部は附加条二種(附加2条)の縄文。	表土中	
TP61	弥生土器	広口壺	-	(37)	-	雲母・石英	にぶい褐	普通	口唇部は縄文が施され、口辺部は附加条二種(附加1条)の縄文。	表土中	
TP62	弥生土器	広口壺	-	(37)	-	雲母・石英	にぶい褐	普通	頭部は縦区画され、櫛歯状工具による波状文。腹部は附加条二種(附加1条)の縄文。	表土中	
TP63	弥生土器	広口壺	-	(57)	-	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	腰帶部2本墨引指痕による押圧が認められる。下縁は附加条二種(附加1条)の縄文。	表土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
Q12	櫛摘具	10.9	4.5	1.6	90.5	砂岩	側縁研磨痕。	表土中	PL 5
Q13	磨製石斧	7.5	3.7	2.0	88	緑色耐火岩	全面研磨。頭部、右側縁一部欠損。	表土中	PL 5
Q14	磨石	8.3	3.9	2.0	89.9	砂岩	3面研磨痕。端部敲打痕。	表土中	
Q15	磨石	8.1	3.9	2.7	97.8	砂岩	3面研磨痕。端部敲打痕。	表土中	
Q16	磨石	(3.9)	(4.3)	1.8	(36.9)	耐火岩	全面研磨痕。	表土中	
Q17	磨石	11.6	7.2	2.9	370.2	安山岩	全面研磨痕。	表土中	
Q18	磨石	9.1	5.9	1.7	139.3	砂岩	全面研磨痕。	表土中	
Q19	砾石	(5.7)	4.0	2.9	(97.2)	砂岩	4面砥削。	表土中	
Q20	石皿	(17.1)	(10.1)	(4.6)	(931.6)	耐火岩	全面研磨加工。中央部縫合部欠損。	表土中	PL 6

## 第4節 まとめ

今回の調査によって、弥生時代の竪穴住居跡3軒、古墳時代の竪穴住居跡6軒、土坑1基、時期及び性格不明の土坑1基、溝跡1条を検出した。出土遺物は弥生時代から古墳時代に限られている。ここでは、それぞれの時期の遺構と遺物について概要を述べ、まとめとしたい。

### 1 弥生時代

弥生時代の遺構は竪穴住居跡を3軒検出したが出土土器はいずれも細片が多く、明確に時期を分けることができなかった。しかし、第1号住居跡からはアメリカ式石鎌、櫛摘具の可能性のある石器がそれぞれ床面から出土し、第2号住居跡からも磨石が5点出土するなど当時の生産活動を知る上で良好な資料も確認できた。アメリカ式石鎌については、県内では可能性のあるものも含めて、ひたちなか市東中根遺跡、同武田西塙遺跡、大宮町小祝遺跡など数遺跡が知られている。アメリカ式石鎌は弥生時代後期前半に検出されることが多いが、第1号住居跡が後期後半に位置づけられることから、当該期にもアメリカ式石鎌が使用されていた可能性が考えられる。

穂摘具の可能性のある石器は2点検出されたが、県内でも土浦市原田北遺跡、同原出口遺跡、同西原遺跡、稻敷郡阿見町花房遺跡など数例しか確認されていない。当遺跡から出土したものについては、形態から穂摘具としているが、はかに稻作関連遺物が出土しておらず、使用痕の分析も実施していないため、可能性にとどめておきたい。穂摘具は木製、石製、鉄製、貝製のものが知られている。第9号住居跡から出土している貝刃は貝製穂摘具の可能性もあるが、今後の出土例の蓄積を待ちたい。

弥生時代の稻作の普及については周知されているが、当地域に目を向けると、近世以来、度重なる新田開発が実施されている。しかし、塩害などの影響もあり、米の収穫量はさほどではなかったようである。当該期においても稻作は困難を極めたことが想定される。しかし、周辺の長峯遺跡では耕痕付着の土器、ひたちなか市東中根遺跡からは住居の中から炭化米が検出されており、稻作は当地域にも普及していたと考えられる。水稲農耕を生活の基盤としていた弥生時代において、生産性の高い良好な農耕地を獲得することが、その集落を維持するための主要な条件であったことを考えれば、当遺跡周辺は農耕と漁労活動の両面において、極めて恵まれた場所であったと考えることができる。

また、遺構は確認されていないが、弥生時代中期の遺物も細片ではあるが検出されており、弥生時代中期から後期に至るまで周辺に集落が営まれていたことがうかがえる。

## 2 古墳時代

古墳時代の遺構は竪穴住居跡6軒と土坑1基を検出したが、弥生時代と同様に土器は細片が多く、時期決定は困難であった。古墳時代の遺物は、弥生時代後期後半の第1号住居跡から出土している前期の甕などを除いては後期のものに限られており、検出した6軒の竪穴住居跡も後期にあたるものであるため、古墳時代は後期を中心に生活が営まれていたと考えられる。

## 参考文献

- 1) 栃木県立なす風土記の丘資料館『弥生人のくらし』 栃木県教育委員会 1996年
- 2) 茨城県史編集会『茨城県史料 考古資料編 弥生時代』 1991年3月
- 3) 江幡良夫『研究ノート第3号』『原田北・西原遺跡出土の穂摘具について』 茨城県教育財団 1993年
- 4) 神澤勇一『弥生文化の研究』『貝製穂摘具』 雄山閣 1985年10月
- 5) 大宮町歴史民俗資料館『大宮の考古遺物』 大宮町教育委員会 1995年10月
- 6) 鈴木栄行ほか『武田西堀遺跡 旧石器・縄文・弥生時代編(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第21集』 (財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 2001年3月
- 7) 海老沢稔『東日本弥生時代後期の土器編年 第二分冊』『茨城県における弥生後期の土器編年』 東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会 2000年1月

# 写 真 図 版



調査区全景（東から）



第1・3・5号住居跡完堀状況



第5号住居跡窯遺物出土状況



第2号住居跡完堀状況



第2号住居跡炉石出土状況



第1号土坑遺物出土状況

PL 4



出土土器（弥生土器、土師器）



SI 4-DP4



SI 4-DP3

SI 1-DP1



SI 1-Q2



遺構外-Q2



SI1-Q1



遺構外-Q13



SI 9-N1

出土土製品、石器、貝製品

PL 6



SI 2-Q4



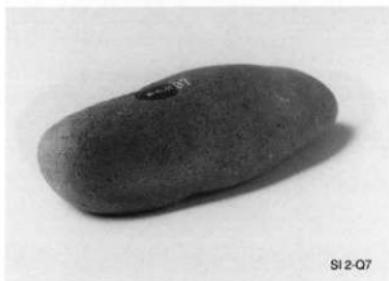
SI 2-Q6



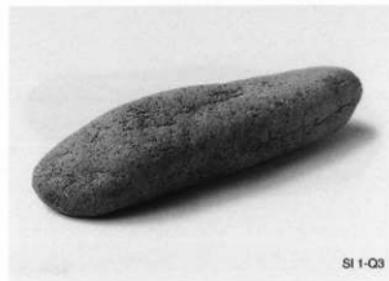
SI 4-Q10



SI 2-Q5



SI 2-Q7



SI 1-Q3

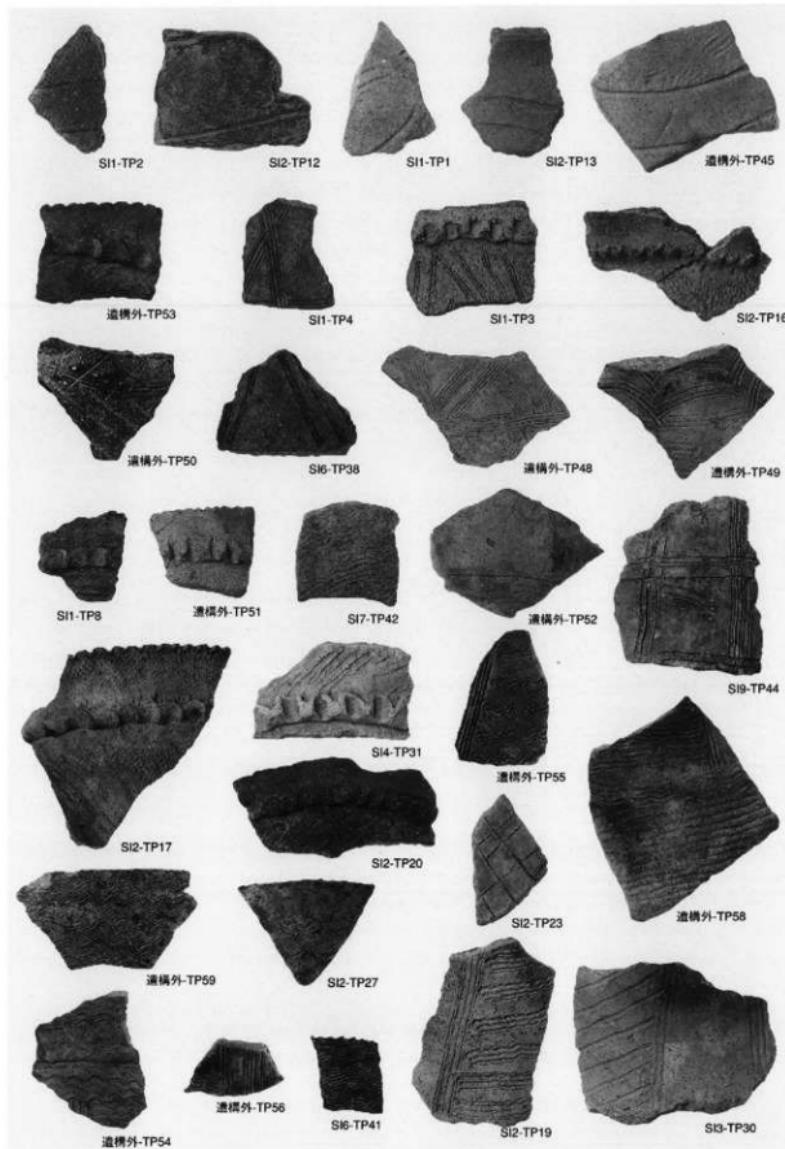


SI 2-Q8



遗境外-Q20

出土石器、炉石



出土土器（弥生土器）

茨城県教育財団文化財調査報告第221集

宮女平遺跡

平成16（2004）年3月24日 印刷  
平成16（2004）年3月26日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団  
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内  
TEL 029-225-6587

印刷 ㈲平電子印刷所  
〒970-8024 いわき市平北白土字西ノ内13  
TEL 0246-23-9051